

新約聖書 マルコによる福音書 3章 20節—35節（新共同訳）

²⁰ イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。²¹ 身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。「あの男は気が変になっている」と言われていたからである。²² エルサレムから下って来た律法学者たちも、「あの男はベルゼブルに取りつかれている」と言い、また、「悪霊の頭力で悪霊を追い出している」と言っていた。²³ そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、たとえを用いて語られた。「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。²⁴ 国が内輪で争えば、その国は成り立たない。²⁵ 家が内輪で争えば、その家は成り立たない。²⁶ 同じように、サタンが内輪もめして争えば、立ち行かず、滅びてしまう。²⁷ また、まず強い人を縛り上げなければ、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。²⁸ はっきり言っておく。人の子らが犯す罪やどんな冒涇の言葉も、すべて赦される。²⁹ しかし、聖霊を冒涇する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う。」³⁰ イエスがこう言われたのは、「彼は汚れた霊に取りつかれている」と人々が言っていたからである。

³¹ イエスの母と兄弟たちが来て外に立ち、人をやってイエスを呼ばせた。³² 大勢の人が、イエスの周りに座っていた。「御覧なさい。母上と兄弟姉妹がたが外であなたを捜しておられます」と知らされると、³³ イエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と答え、³⁴ 周りに座っている人々を見回して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。³⁵ 神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「聖霊」

本日の福音書は「イエスが家に帰られると」という言葉から始まります。「家」とは、イエスの故郷ナザレの自宅ではありません。おそらく、カファルナウムでの伝道の拠点として、イエスの住まいとして提供されていた、弟子の「シモンとアンデレの家」のことでしょう。

そこにいたイエスのもとに、救いを求める群衆が集まってきて、イエスと弟子たち一同は食事をする暇もないほどでした。

一方で、「あの男は気が変になっている」というイエスの噂を耳にして、イエスを取り押さえに来たイエスの家族と、イエスの言動を監視するためにエルサレムから下ってきた律法学者たちとがいました。

身内がイエスを「取り押さえに来た」とありますが、この「取り押さえる」は、

のちに律法学者たちがついにイエスを「捕らえる」ときに用いられる言葉と同じです。家族はイエスを捕まえて、自分たちの家に連れて帰ろうとしていたのでしょう。

人々がイエスについて噂していた「気が変になっている」と訳されているエクシステミというギリシア語は、「正気ではない」「世の常識の外に立つ」という意味です。

律法学者たちはイエスのことを、秩序を破壊する悪霊のようなものと認識しました。彼らは、イエスの力あるわざに脅威を感じながら、それが神からのものであるのを認めず「あの男はベルゼブルに取りつかれている」「悪霊の頭〔かしら〕の力で悪霊を追い出している」とイエスを中傷しました。

ベルゼブルとは、元来は「家の主」という意味であったようですが、ここでは「悪霊の頭」を指します。

それに対してイエスは、「どうしてサタンがサタンを追い出せよう」と答え、内輪で争えば国や家は成り立たないと、たとえを話しました。

「サタンがサタンを追い出す」とは、「一人の悪魔がもう一人の悪魔を追い出す」ということではありません。「サタンが自分自身を追い出す」という意味です。したがって「どうしてサタンがサタンを追い出せよう」とは、「どうしてサタンが自分自身を追い出すことができるだろう」という意味です。

家が内輪で争えば、その家が成り立たずに滅びてしまうように、サタンが内輪もめして争えば、立ち行かず、滅びてしまう。しかしサタンが自らの支配の中で自己と争うことはあり得ない、ということです。

イエスのもとに来た身内の人には、イエスを取り押さえようとする意識があり、律法学者たちには、イエスを排斥しようとする意識がある、という点で通じるものがあります。両者は、イエスに対して無理解な人々の姿という点で共通しています。

イエスと律法学者たちとのやり取りのあと、31節からは「イエスの母と兄弟たちが来て外に立ち、人をやった」と、イエスとその身内との話にまた戻ります。ここからは、イエスの血縁の家族と対比して、イエスの語る「神の家族」について記されています。

「神の家族」とは、神の御心を行い、神の命によって生かされている者同士の交わりということです。

元来、イスラエルの人々は、家族や祖先とのつながりを大事にしました。彼ら

は個人主義ではなく、共同体の生活をし、「家」や「家族」と結びついた生活をしました。しかしイエスはこのような家族関係そのものよりも、それを越えた霊的家族の関係を重んじました。人間の家族関係の中には、清められる必要のある縛りや不純なものがあることを示唆したのです。

イエスの「神の家族」の宣言は、実の身内であるイエスの母と兄弟たちにとっては、自分達への拒絶として聞こえたでしょう。

しかしこれは、究極のところ、イエスの家族に対する招きでもありました。そして、ここに出てくるような形ではもう二度と登場することのない、イエスの母と兄弟たちは、のちにそれぞれがイエスに従う者となったのです。彼らはもはやイエスの肉親の母や兄弟としてではなく「神の家族」となるのです。

つまり、血縁や家という関わりに閉ざされるのではなく、「神の御心を行う」という大きなつながりの中に置かれる時に、家族もまた、神によって結び合わされたパートナー、隣人へとなっていくのです。

このようにしてイエスは、身内の家族との関係を確立しました。彼らと完全に縁を切ったわけではなく、それまでの血縁や家による家族との関係性を、一旦、拒絶して、新たに再建したのです。

「イエスが家に帰られると」から始まる本日の福音書は、「家族」「家」というテーマが柱となっていると思います。

「悪霊の頭」を表す「ベルゼブル」という言葉のもともとの意味は、「家の主」だということにも、何か含みがあるのではないのでしょうか。

イエスの言葉の中にも「家」という単語が頻繁に出てきます。

イエスは、こうも言いました。「家が内輪で争えば、その家は成り立たない」。

家が内輪で争えば、その家は成り立たず滅びてしまうというのです。

この言葉からは、イエスが「家」「家族」を、どうでもいいものとして軽視していたわけではなく、核となる存在として重視していることが感じられます。

今年も、もうすぐ半分が過ぎようとしています。

私たちも、「神の家族」として心を合わせ、日々を共に歩んで行きましょう。

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 創世記 3章 8節—15節（新共同訳）

⁸その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、⁹主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」¹⁰彼は答えた。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」¹¹神は言われた。「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか。」¹²アダムは答えた。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださいました女が、木から取って与えたので、食べました。」¹³主なる神は女に向かって言われた。「何ということをしたのか。」女は答えた。「蛇がだましたので、食べてしまいました。」¹⁴主なる神は、蛇に向かって言われた。「このようなことをしたお前は、あらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で、呪われるものとなった。お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。¹⁵お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に、わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く。」

新約聖書 コリントの信徒への手紙 二 4章 13節—5章 1節（新共同訳）

¹³「わたしは信じた。それで、わたしは語った」と書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じ、それだからこそ語ってまいります。¹⁴主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。¹⁵すべてこれらのことは、あなたがたのためであり、多くの人々が豊かに恵みを受け、感謝の念に満ちて神に栄光を帰すようになるためです。

¹⁶だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。¹⁷わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。¹⁸わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

¹わたしたちの地上の住みかである幕屋が減びても、神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住みかです。

教会讃美歌 119番「主のみ霊くだりまし」1,2,4節、131番「聖なる聖なる」1,2,4節、151番「ひとの目には」1,2,4節、181番「ここにいます」1,2,3節